

関西大学博物館所蔵の津雲貝塚出土資料

山下 大輔

一 はじめに

現在本山コレクションとして、関西大学博物館に所蔵されている資料のなかに、岡山県笠岡市西大島に所在する津雲貝塚出土とされる資料がある。本山コレクションとは、大阪毎日新聞社社長であった本山彦一氏が所蔵していた資料を、本学教授であった末永雅雄先生が整理され、その縁で関西大学が寄贈をうけたものである。本山氏は考古学に深い関心をもたれ、自身でも発掘調査を行っている。その中でも小稿で扱う津雲貝塚の発掘は、大阪府藤井寺市国府遺跡、山口県下関市長府鑄銭跡遺跡の発掘とともに、本山氏自身が三大発掘といわれているうちの一つである。小稿では、この津雲貝塚出土の資料のなかでも縄文時代に属すると考えられる資料を取り上げ、解説および若干の考察を加えたい。

二 津雲貝塚発掘調査史抄

津雲貝塚は岡山県笠岡市西大島に所在し、縄文時代後・晩期を主体とする貝塚である。約一八 体もの人骨が検出されたことでも著名であり、

形質人類学的方法により当時の縄文人の特質を解明する上でも重要な遺跡である。当遺跡は、明治三年に該地で堤防工事が施工された際に、多量の土器・貝殻・人骨片等が出土したことでの存在が知られることとなる。大正四年二月には鳥居龍蔵氏が発掘を行い、人骨は検出されなかったが、土器・貝殻・獣骨等が出土したという。

津雲貝塚の発掘に関する記事が初めて新聞紙上に現われるのは、大正四年八月十日の大阪朝日新聞においてであり、その後も多くの研究者により発掘調査が実施されてきた(表1)。しかし、その調査成果が詳細に報告されているのは、一九一九～二二年(大正八～十年)にかけて清野謙次博士によつて行われた四次にわたる発掘調査に關してのみである。これらのうち、第一～三次調査の成果については、『備中国浅口郡大島村津雲貝塚発掘報告』(島田・清野・梅原一九二一)として京都大学考古学教室から出版されており、第四次調査に關しては、『日本貝塚の研究』(清野一九六八)の中でその概要が報告されている。ここでは、まずこれらの発掘調査の成果をまとめてみたい。

津雲貝塚は、北側に丘陵を負い、前面に沖積平野を望む緩やかな傾斜地に立地する。この沖積平野は当時は海であり、貝塚は海岸に面し標高約一 m の所に存在していたと考えられる。清野博士が実施した発掘調

人名	発掘年次	人骨数	図一照符号	参考文献
鳥居龍蔵	大正4年2月	0	TO	
松枝惣十郎	大正4年3月	5?	MA1	
内田寛一	大正4年6月	2	UC	4
松枝惣十郎	大正4年11月	4	MA2	
松枝惣十郎	大正5年9月	8	MA3	
服部照次	大正6年	?	HT	
弘津史文	大正7年2月	1	H	
大串菊太郎	大正7年3月	1	OG1	1
大串菊太郎	大正7年7月	4	OG2	1
松枝惣十郎	大正7年9月	3	MA4	
松枝惣十郎	不詳	2	MA5	
大串菊太郎	大正8年7月	11	OG3	1
長谷部言人	大正8年8月	2	HA1	
清野謙次	大正8年9月	11	A.B...	15、16
清野謙次	大正8年9月	33	I.II...	15、16
長谷部言人	大正8年12月	22	HA2	
清野謙次	大正8年12月～9年1月	22	a.b...	17
大串菊太郎	大正9年5月	35?	OG4	

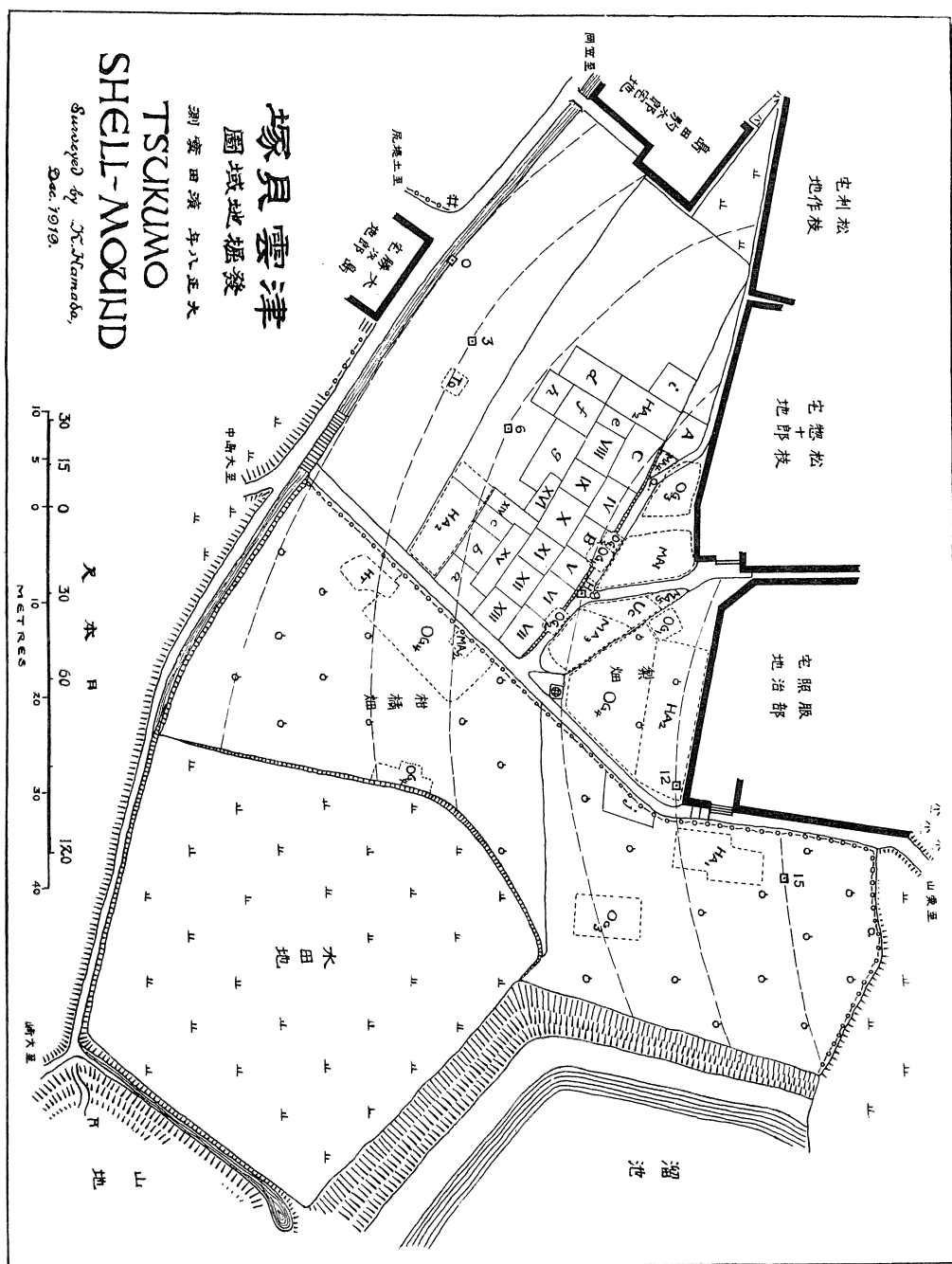
表1 津雲貝塚発掘調査歴

査は、南北約一七m、東西約三五mにわたる範囲で行われた（第1図）。本調査区における層序は、まず表土があり、黒色土、貝層、黒色土、最下層には粘土層が堆積する。遺跡が緩斜面に立地していることもあり、調査区の中には貝層の存在しない地点が認められ、各層の堆積状態は若干異なるが、基本的な層序に違いはみられない。表土は攪乱層であり、獣骨・貝殻・土器片などが若干みられる。上層の黒色土層からは少量の土師器、弥生土器、縄文土器が出土し、貝層からは縄文土器のみが出土している。粘土層は無遺物層である。

清野博士が関わった四次にわたる調査において、人骨は六四体検出されている。そのうち、腰飾を伴うものは三例、貝輪を前膊部に装着していた例は九例認められている。この貝輪をはめ込んでいた九体の人骨のうち、第三六号人骨以外の八体が女性である。人骨は上層の黒色土からも検出されているが、その多くは貝層から出土している。

土器 人骨以外の出土遺物としては石器・骨角器・獣骨・貝製品・貝殻・土製飾玉・土偶などが挙げられるが、土器に比べその数は多くない。石器は四次の調査をとおして約三 点ほど出土している。その内訳は石鏃、凹石、磨製石斧、石錘、砥石、磨石、石包丁などである。骨製品としては鹿角製耳飾、鹿角製腕飾、腰飾、骨製釣針などが挙げられる。また、先述のように貝輪が九体の人骨にはめられた状態で出土している。貝類に関しては、セタシジミやハマグリなど一三種が確認されており、獣骨は主にシカおよびイノシシのものである。

以上、調査成果が詳細に報告されている清野氏が実施した四次の調査について概略を述べてきた。津雲貝塚は、出土した多数の人骨から導き



出される数々の情報の重要性のみならず、大量に出土している土器、あるいはこれらの遺物に伴って検出された多種多様な獣骨、貝類、石器類は当時の人々の技術および生業形態を復元する際に重要な位置を占めるといえる。この点において当貝塚は、その重要性を正當に評価されるべきである。また、これらの調査において出土した人骨に関しては多くの研究がなされているが、ここでは紙幅の関係もあり、詳しくは述べない。

三 岡山県津雲貝塚出土資料

現在関西大学博物館が所蔵し、今回図化し得た津雲貝塚出土資料の総数は六 点である。その内訳は乳児甕棺一点（完形復元）、甕被葬に使用された甕一点（復元）、土器片三三点（底部七点を含む）、石器類二点、土偶頭部一点、貝輪二点である。

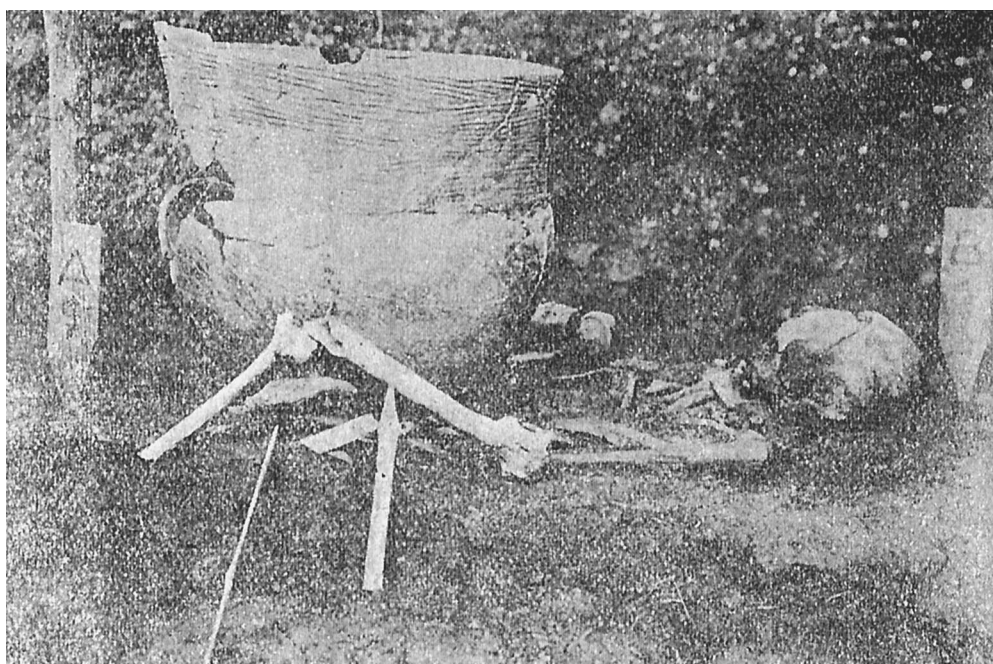
以下、実測図の番号に従い、各資料について詳細に観察する。

1 は中に乳児骨が埋葬されていたといわれる甕棺である（本山番号五九六）。口縁部径四・三 cm、高さ四四・八 cm を測る粗製の深鉢形土器である。胴部は若干張り、頸部がやや屈曲しており、口縁に向かい緩く外反しながら立ち上がる。口縁端部には篋状工具により刻目を施し、現在では一基しか残存していないが、実測図では三基の横長長方形の突起を有するものとした。口縁から頸部にかけての外面は、二枚貝条痕による調整を施し、胴部は二枚貝を立て、その腹縁部で器面を撫でて調整している。断面 U 字の太い沈線により、頸部と胴部が区画される。底部付近は下から上に向かって二枚貝条痕を施す。底部は段をもつ凹底を呈す。

内面は口縁部直下に一本の断面 U 字の沈線を施すが、これは口縁内面を全周するものではなく、施さない部分も確認できる。内面は全体的に丁寧なナデ調整を施し、接合線が数本確認できる。器面は丁寧に調整されており、平滑である。底部に向かって器壁は厚くなり、底部付近の内面はオサエによって調整し、凹凸が目立つ。時期は晩期前半に属すると考えられる。

この乳児甕棺には先述のように突起は一基しか遺存していないが、口縁端部を観察すると、口縁を三等分する位置に刻目が施されていない箇所があることが分かる。また、遺存する突起の内面には竹管により C 字の刺突文を二段にわたり施し、下段の刺突文を突起部下半から口縁部にわたり割り印のように施している。残りの二箇所は刻目を施さない口縁内面にも同様の C 字刺突文が半分だけ確認できる。遺存する一基の突起部同様に、残りの二箇所にも突起を有し、内面には C 字の刺突文を施していたが何らかの理由で剥離したため、刺突文のみが遺存しているのであらう。また、その下部には、口縁端部と突起を貼り付けるために粘土を下から上に積み上げた痕跡が隆帯状に残る。これらのことから当初三基あった突起の内二基はすでに欠損し、残りの一基のみが遺存するものと考えられる。さらに、刻目を施さない口縁端部は、その状態および色調が他の部分と比較しても自然であるため、三基あった内二基の突起は焼成段階で剥離・欠損したものと考えられる。

また、石野博信氏が既に指摘されておられることであるが、『本山考古室要録』では、この幼児甕棺の出土状況写真を掲載しているが、これは京大報告書の図版第一二下に掲載されているものと同一であり、土器



第2図 大串氏発掘津雲第六号人骨出土状況（大串1920より転載）

自体の比較から、当甕棺とは異なる個体であることは明らかである。一方、大串菊太郎氏の論考（大串一九二）第二二項に掲載されている第六号乳児骨を埋葬したとされる甕の出土状況写真（第2図）を観察すると、土器の形態から当甕棺と同一のものである可能性が高い。そのため当甕棺は、大正八年七月、大串菊太郎氏の第三回目の発掘調査の際に出土した甕棺であると考ええる。

2は土器器面に「二号人骨頭蓋ヲ覆ヒアリシ土器」と表記された深鉢形土器である（本山番号五九九）。口縁部径三四cmを測り、口唇部には刻目が施される。実測図は胴部の一部および底部を欠くのみで、ほぼ完形に復元されているが、実際には口縁部については約六分の一しか残存しておらず、全体でもその多くの部位が欠損しているため、推定復元を行った。

器形は口頸部と胴部に二分される器形となり、胴部が緩く張り、口縁部に向かって若干外反しながら立ち上がっていく。底部は欠損しているがおそらく凹底を呈すものと考ええる。口唇部の刻目は・五〜一cm程度の間隔で施されており、その断面はしおよびV字を呈す。外面は口縁部直下から頸部にかけて巻貝条痕で調整されている。胴部は巻貝条痕後ナデ調整が施されており全体的に粗雑である。内面口縁部直下には強い横方向のナデが施され、一本の凹線状を呈す。口縁部から頸部にかけてはオサエにより調整されており、凹凸が目立つ。胴部から底部にかけては丁寧なナデ調整で比較的平滑である。時期は晩期前半に属するものと考えられる。

甕被葬は大阪府国府遺跡例が著名であるが、大串菊太郎氏の論文の中に

「頭部を保護する為に用いた土器の破片は、津雲地方にも其類似品を有して居る。」(大串一九二)とあることから、津雲貝塚でも検出が確認されているようである。しかし具体的にその発掘者、発掘年あるいは出土状況などに関して詳細な記録がないため、その特定は難しい。

3-5は晩期前半の黒色磨研浅鉢に相当する土器群である。3は埴形の浅鉢と考えられ、外面には四本の断面U字を呈する凹線を施す。器面は丁寧に磨いて調整している。内面も全体的に丁寧に磨いており、平滑で黒色を呈する。4は黒色磨研浅鉢で、復元すると口縁部径三一・八cmを測る。器形は胸部が強く張り、口縁に向かい緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁部付近でほぼ垂直に立ち上がる。口唇部は丸みを帯びる。内外面ともに丁寧に磨き黒色を呈す。胎土中には直径・五mm以下の金雲母と白色砂粒を多少含む。5も黒色磨研浅鉢で、口縁は径一八・八cmを測る。胸部は張り、頸部から口縁部にかけて外反する。口縁端部の立ち上がりはみられない。内面の口縁部直下には一本の凹線を施す。内外面ともに丁寧に磨き黒色を呈す。胎土中には直径一mm以下の角閃石と白色砂粒を多少含む。

6および7は後期末-晩期前半に比定されるであろう深鉢形土器である。6は粗製の深鉢で、口縁部が他の部分に比べ若干肥厚する。外面は巻貝条痕で調整し、口唇部は面取りする。内面口縁部付近には横方向の強いナデにより、断面レの字の沈線を施す。内面はナデ調整を施すが、全体的に粗雑である。胎土には直径一mm以下の金雲母が多く含まれる。7は口縁部が外反する粗製の深鉢で、口縁は緩やかな波状を呈すと考えられる。外面は二枚貝条痕調整だが、その調整は粗く、口唇部に面取り

は施されない。内面はナデおよびオサエにより調整している。

8-13は凹線文系の土器群である。8は凹線文系の浅鉢で、口縁には半円形突起部を持つ。外面には二本にわたる凹線を施し、突起部の直下にはこの凹線を隔てるように巻貝による扇状圧痕文がみられる。さらにこの扇状圧痕文の両側には巻貝の殻頂部による刺突文を施す。体部にはオサエによる調整がみられる。内面は全体にわたりナデによる調整を施すが、口縁部付近はナデ後オサエを施し、凹凸が目立つ。胎土中には直径一mm以下の石英が含まれる。後期末の宮滝式に比定されるものである。9は凹線文系の浅鉢であると考えられる。胸部がくの字に屈曲し、口縁に向かいほぼ垂直に立ち上がる。外面には三本の凹線を施している。胸部および内面はナデによる調整がみられる。凹線文上に巻貝圧痕文はみられないが、8同様に宮滝式の浅鉢と思われる。10は凹線文系の深鉢の口縁部である。口縁はほぼ垂直に立ち上がっており、外面には比較的浅い巻貝による凹線を三本施している。また外面から施された補修孔がみられる。内面はナデによる調整であるが、口縁部直下には一本の浅い凹線を施す。胎土中には直径・五mm程度の金雲母が若干含まれる。11は凹線文系浅鉢の胸部および口縁部付近の破片であり、口径は一六cm前後を測るものと思われる。9同様に胸部はくの字に屈曲し、口縁は若干内湾しながら立ち上がる。外面には巻貝による三本の凹線が認められ、くの字に屈曲する部分に重なるように扇状圧痕文を施す。外面胸部はナデを施し、内面口縁部近から屈曲部にかけてはナデ後オサエで調整し、胸部はオサエにより調整する。内面は全体的に凹凸が目立つ。胎土中には・五mm以下の石英が認められる。型式的にみれば宮滝式に属するも

のであろう。12は凹線文系深鉢の口縁部である。口縁は緩やかに外反しながら立ち上がり、口唇部は面取りされる。外面口縁部直下には三本の凹線を施し、一部巻貝の殻頂部によると思われる刺突文が認められる。内外面ともにナデにより調整している。胎土中には直径1mm以下の金雲母および白色砂粒が認められる。13も凹線文系深鉢の口縁部である。口縁には半円形突起が付き、この突起に沿うように外面口縁部直下には凹線を施す。巻貝による扇状圧痕文を二段にわたり施し、さらに二本の凹線を施す。内面はナデ後オサエにより調整するが、外面からの巻貝の押圧により凹凸が目立つ。胎土には直径1mm以下の金雲母および白色砂粒が多く含まれる。宮滝式に比定されるものであろう。

14、21は縁帯文系土器群である。14は口縁部が肥厚し断面丁字を呈す深鉢である。肥厚する口縁部は縄文(LR)を施した後に凹線で区画する。内外面ともにナデ調整を施すが、全体的に調整は粗雑である。後期中葉津雲A式である。15は口縁部が波状を呈し肥厚する縁帯文系土器の口縁部である。肥厚する口縁部には右斜・左斜と両方がみられる縄文(RL)が施される。その後沈線により渦巻き文を施すが、この沈線は粗雑で、一部線が途切れる部分が見られる。内面はヨコナデにより調整する。津雲A式。16はやや波状を呈す縁帯文の深鉢の口縁部である。肥厚する口縁部には縄文(LR)を施し、波頂部には同心円文を施す。波頂間には窓枠状を呈す沈線文をめぐらしている。内面はナデ調整を施す。胎土には直径1mm以下の角閃石が多く含まれる。津雲A式。17は口縁が波状を呈す縁帯文系深鉢の口縁部である。波頂部には三点の刺突文を配し、その下には縄文(LR)を施した後に一本の沈線をめぐらす。口唇部は面取り

する。内面はナデによる調整を施す。津雲A式と考えられる。18は肥厚する口縁が、ほぼ垂直に立ち上がる縁帯文系深鉢である。口縁部はやや丸みを帯びるように肥厚し、その外面には縄文(LR)を施す。この肥厚する口縁直下は強くナデを施し、その下部はナデおよびオサエで調整する。内面の口縁直下は丁寧なナデを施すが、それ以外の調整は粗雑である。津雲A式か。19は口縁部外面が突起状に肥厚する深鉢形土器である。この突起状の口縁の突出する頂部および口唇部は欠損し、突起の中央は空洞状を呈す。突起状口縁部全体に縄文(LR)を施し、その中を数本の沈線がめぐる。20は肥厚する口縁外面の下部に強いナデを施すことにより断面三角形を呈す深鉢の口縁部である。口縁部は外反しながら立ち上がり、肥厚する口縁外面には縄文(LR)を施す。内外面ともに丁寧なナデにより調整し、平滑である。胎土には直径1mm以下の石英を多く含む。21はくの字に強く屈曲する注口土器の体部と考えられる。外面には横および斜め方向にめぐる沈線を施し、一部には刺突文も認められる。内面は丁寧なナデ調整を施す。

22および23は後期前葉に比定される磨消縄文系の土器である。22は口縁がやや外反しながら立ち上がり、若干尖り気味の口唇部をもつ深鉢形土器である。口縁部付近には上下二段の文様帯があり、下段のものには横長のJ字文を施す。内外面ともに丁寧ミガキを施し、平滑となる。器面に「大正七年七月」と記されていることから、大串氏の第二回発掘時出土の土器である。23は口縁が外反しながら立ち上がり、先端がやや尖り気味の磨消縄文系の土器の口縁部である。外面に施される磨消縄文は三本一単位の沈線で区画する。口唇部にも斜め方向の沈線を施す。

また、内面口縁部直下にも一本の沈線がめぐる。内外面ともに丁寧ミガキ調整を施し、器壁は平滑である。福田 K 式か。

24 と 25 は中期の土器である。24 はキヤリパー形の深鉢の頸部であろう。屈曲部を境とする頸部上半には磨消縄文を充填し、下半には縦方向の沈線を施す。内面はオサエおよびヨコナデにより調整する。胎土内には直径 2mm 程度の比較的大粒の白色砂粒が目立つ。25 は中期後半に比定される里木 式の深鉢の胴部片であろう。外面には平行沈線を施し、その間には刺突文を施す。内面は丁寧ミガキを施し平滑にしている。

26 ～ 28 は時期を特定できなかった土器群である。26 はやや外反する口縁の外面が若干肥厚する深鉢形土器の口縁部である。肥厚する口縁部外面には、篋状工具で施したと考えられるハの字状の沈線を、口縁部をめぐるように施している。肥厚する口縁部直下から頸部にかけても縦方向の沈線が施されていることから、後期中頃の縁帯文の可能性が高い。27 は縄文地（LR）に弱いナデを施した深鉢形土器の胴部と考えられる。内面には縦方向のケズリを施す。28 は深鉢形土器の体部であろう。外面は縄文地（LR）にナデを施しており、一部は縄文がナデ消されている。内面はナデ後オサエにより調整を施している。

29 ～ 35 は土器の底部である。29 は凹底で底面から垂直に 1・5cm ほど立ち上がり、その後外反しながら胴部へと続いてゆく。底面は丁寧ミガキ調整し、平滑である。内面はナデ調整を施し、それに伴う削痕がみられる。外面には縦方向の削痕が目立つ。30 も凹底であり、底面から胴部に向い緩やかに外反しながら立ち上がる。底面および内面の調整は丁寧ミガキで、器面は平滑である。外面はヨコナデによる調整を施す。31 は凹底で、底面

から胴部に向けて外反しながら立ち上がる。内外面ともにナデ調整を施す。32 はやや凹底気味であるが、凹みは非常に浅い。底面から胴部に向かい外反しながら立ち上がる。調整は内外面ともにオサエによるものである。33 は凹底であり、脚部の端部がユビオサエにより刻目状を呈す。

底面から 2cm ほどは緩やかに外反し、その後胴部に向けて強く外反してゆく。内外面ともにオサエおよびナデによる調整を施す。34 は底面外縁を指で摘み、脚部を造り出す。脚部の端部から 1cm ほどやや内湾しながら立ち上がり、その後外反する。脚部外面にははつきりとユビオサエの痕が残る。内面はオサエによる調整だが粗雑である。35 は唯一の平底である。底面から 1・3cm ほどは垂直に立ち上がり、その後外反する。底面・外面ともにナデによる調整で、内面は摩滅が著しい。

36 は土偶頭部である（本山番号五一）。鼻から下が欠損しており、全体の形状は不明である。頭部は半円形を呈し、粘土紐を丁字に貼り付けることで眉および鼻を表現しているが、右眉の半分は欠損している。目は刻線によって表現される。遺存高は 6・55cm である。

37・38（本山番号五八一）は人骨に装着されていたといわれるハマガリ製の貝輪である。37 は右腕にはめられていたもので、縦 7・4cm、横径 6・0cm である。38 は左腕装着のもので、縦 7・1cm、横径 5・7cm である。これらの貝輪は大正八年十二月に長谷部言人氏が行った発掘の第三号人骨の前膊部左右に、一つづつ装着されていたものである。

次に、石器類に関してその観察結果を述べる（計測値の詳細は表 2 参照）。39 は玄武岩製の敲石である（本山番号五九五）。長さ 8・7cm、幅 5・8cm、厚さ 4・7cm、重さ 293g を測り、下端は欠損する。上部

先端で敲打したと考えられ、使用痕が認められる。

40は花崗岩製の石錘である（本山番号五九五）。長さ九・一cm、幅五・二cm、厚さ四・二cm、重さ二八gを測る。明確な切目は認められないが、上部先端には線刻状の凹みが確認でき、下部先端にも凹みが認められ、それらは自然のものではなく使用痕を伴うものと考えられる。また、右側縁には約一の凹みが、左側縁中央部からやや上部にも同様の凹みが認められ、両者ともそれに伴う使用痕が見られる。このことから長軸・短軸双方に縄掛け用の凹みを施した石錘と考えられる。表面下端には楕円形を呈する穿孔が認められるが、石器の機能とは無関係のものである。

41は石核である（本山番号五九五）。長さ九・五cm、幅九・二cm、厚さ四・四cm、重さ五・六gを測り、ほぼ円形を呈する。表面中央部および裏面中央部と右下端部には広い原礫面を残す。打撃痕は認められないが、表裏面ともに縁辺部からの打撃により、幾枚もの剥離面が重なる。

42は削器、剥片および楔形石器である。42は表面に原礫面を残す剥片である。下端は切断されており、明確な打面調整は認められない。43は表面に一枚のポジティブな面を残す剥片である。裏面には原礫面を残す。44は表面右側縁および下端、裏面左側縁に剥離面を残す削器である。裏面にはネガティブな面が一枚認められる。45は表裏面ともポジティブな面を残す削器である。上端半分と表面左側は切断される。上端には表裏面とも幾枚かの剥離痕が残る。46は裏面左側縁上端に被熱痕を残す剥片である。表面右側上部・下部ともに欠損する。47は表面にネガティブな面を一枚残す剥片である。表面に数枚の剥離痕が残り、おそらく

削器として使用されたものである。48は裏面に打点を残す削器である。裏面左側縁上部に剥離痕が認められる。49は右側縁に原礫面をつける剥片である。裏面に広く石核底面を残す。50は裏面に広く石核底面を残す剥片である。表面下端に原礫面をつける。51は表面左側縁に剥離面を幾枚も残すラウンド・スクレイパーである。表面にはポジティブな面を一枚残す。52（本山番号五九四）は表面左側縁および裏面左側縁に剥離面を残す削器である。右側縁下端および下端は切断される。53（本山番号五九四）は表面左側縁および裏面両側縁に幾枚の剥離面を残す削器である。裏面には打点付近の面を一枚残す。54はチャート製の削器である。裏面右側縁に数枚の剥離面を残し、下端部は切断される。55は表面にポジティブな面を一枚残す剥片である。右側縁下端は欠損する。56は表面右側縁および裏面左側縁に剥離面を残す削器である。打点は認められない。57は表面左側縁および裏面右側縁に剥離面を残す削器である。上端および下端は調整後切断される。58は明確な打点および打面調整が認められない剥片である。剥離面は何枚か認められるが、これが何を意図したものは不明である。59は表面右側縁および裏面左側縁、上端に剥離面を幾枚も認められる削器である。裏面には打面が一枚認められる。下端は欠損する。60は唯一の楔形石器である。裏面に石核面を残し、表面下端から打撃が加えられている。表面左側縁には裏面からの剥離痕がみられ、裏面左側縁には表面からの細かい剥離痕が認められる。

四 まとめ

以上、関西大学博物館所蔵の津雲貝塚出土資料を観察し、その結果を述べた。これをふまえ、若干の考察を加えたい。

今回図化した中で、最も数が多かったのが土器である。総点数で三五点を数え、その時期は縄文中期から晩期前半におよぶ。早期に属する土器の出土も報告されており、津雲貝塚は縄文早期から晩期におよぶ長い間、人々の生活の場として利用されてきたことがうかがえる。

これらの土器の中でも、晩期前半の幼児甕棺に使用されたと思われる土器および同じく晩期前半に属すると考えられる甕被葬に使用された深鉢形土器に注目したい。これらの類例は、縄文時代晩期の埋葬形態の多様性を示し、当時の人々の死者に対する観念を推定する際にも、重要な情報を提供してくれるものと考えらる。

甕棺は従来、幼少にして亡くなった幼児を埋葬する際に使用されたものと考えられているが、成人の骨の一部を埋葬した甕棺（土器棺）も、当該期においての検出例が報告されている。山陽地方では、晩期の墓址の検出例は少ないが、近畿地方では晩期中葉には土器棺墓が数多く検出されており、その中に人骨を納めたものも存在する。当甕棺同様に乳児の全骨格を埋葬するものに加え、成人骨の一部を納める例も存在していることから、近畿地方において両者は併存するものであり、山陽地方においてもその可能性を否定できない。このことから幼児甕棺は、幼少にして亡くなった乳幼児のみを対象とした埋葬形態ではなく、成人骨の一

部を納めた再葬墓としての機能も持ち合わせており、両者の関連性という点から議論する必要がある。

甕被葬は、先述のように大阪府国府遺跡での前期の例が著名であり、前期から晩期にわたる長い間みられる埋葬形態の可能性が高い。同様の類例として、愛知県吉胡貝塚、同稲荷山貝塚と当津雲貝塚が挙げられる。しかし、類例も限られ、各遺跡の埋葬人骨の装飾品の有無、人骨の人類学的特徴などの関連性もみられないことから、その機能および縄文社会における位置などは明確にされていない。そのため、人骨頭部に被覆された土器は、単に頭部を保護するためのみのものであり、従来は草木で覆っていたものを、甕に置き換えたものであろうという見解に落着いているようである（石野一九九八）。同様の類例の集積が俟たれる。

これまで、津雲貝塚出土の資料の提供する重要性は、そこから出土した数多くの人骨の分析によるところが大きかった。しかし、先述のように、津雲貝塚から出土した土器は早期から晩期にまでわたり、それらの提供する情報が縄文社会の実情を解明する際に担う役割は決して小さくはない。また、人骨の出土状況から当時の埋葬形態の多様性が看取でき、考古学において最もその復元が困難とされる精神世界についても、有益な手がかりを提供するものと考ええる。発掘調査の詳細を記録する報告書等が少ない点が惜しまれるが、人骨以外の出土遺物の所在も確認し、それらの遺物を詳細に観察・検討することで津雲貝塚の重要性が再確認されるのではなからうか。

小稿を成すにあたり、関西大学博物館の山口卓也氏より、種々ご配慮

を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

【註】

この新聞記事の内容は、京都帝国大学の内田寛一氏が同年六月一七日にかけて行った調査において出土した人骨についての談話である。

当時津雲貝塚における発掘調査の成果は、出土した人骨が他に類を見ないほど大量であったこともあり、考古学的というよりは人類学的に重要視されており、議論の焦点は日本民族の起源に置かれていたようである。事実、津雲貝塚出土の人骨に関する研究は数多く存在するが、調査の成果を詳細に記録した報告書等の資料は、京都大学考古学研究室が刊行した『備中国浅口郡大島村津雲貝塚発掘報告』と清野謙次氏の『日本貝塚の研究』のみである。

清野博士の調査以外のものも含めると一七四体を数える。

津雲貝塚出土の人骨に関する研究については参考文献の3、5、7、14、19が挙げられる。

今回小稿で対象としたのは縄文時代に属すると考えられる遺物のみであり、また、細片のため図化し得なかつた土器片が数点存在する。

石野博信氏は、「口縁端部を観察すると2ヶ所に15 cmと5 cm余の欠失部分があり、15 cm余の部分に突起があつたとしても3基にはなり得ない。」(石野一九九八)と述べられているが、筆者は本文中で述べた理由で突起は3基あつたものと考ええる。

参考文献1参照

これらの貝輪の出自については、すでに石野博信氏が関西大学博物館の

資料図録の中で指摘されておられる。『本山考古室要録』によれば、これらの貝輪を装着した人骨は第三人骨である。さらに『京都大学文学部考古学研究報告 第五冊』によれば、清野氏の第三号人骨には貝輪の装着がないが、長谷部氏が発掘した第三号人骨には左右腕部に一つづつの貝輪が装着されていたという。このことから石野氏は本例の貝輪は長谷部氏第三号人骨装着のものと考定しておられる。筆者も石野氏の指摘に矛盾はなく、妥当と考えるためこの考定に従った。

本山番号五九五番の石器は『本山考古室要録』に、大正八年七月二五日貝層上部出土との記載があるため、大串氏第三回発掘の出土品である。

【参考文献】

1、石野博信 一九九八「一 貝輪」「一 甕棺」『関西大学博物館資料図録』

2、大串菊太郎 一九二「津雲貝塚及河内國国府石器時代遺跡に對する

二三の私見」『民族と歴史』第三卷第四号

3、岡本辰之輔・関政則 一九三「津雲貝塚人骨の身体各部比例に就

て」『人類学雑誌』第四五卷第二号

4、内田寛一「二千年前の枯骨」(大正四年八月十日大阪朝日新聞掲載)

5、金高勘次・三宅宗悦・真岡亀四郎 一九三八「津雲貝塚彫刻骨の研究」

『人類学雑誌』第一輯

6、喜田貞吉 一九一九「津雲貝塚発掘史」『民族と歴史』第二卷第五号

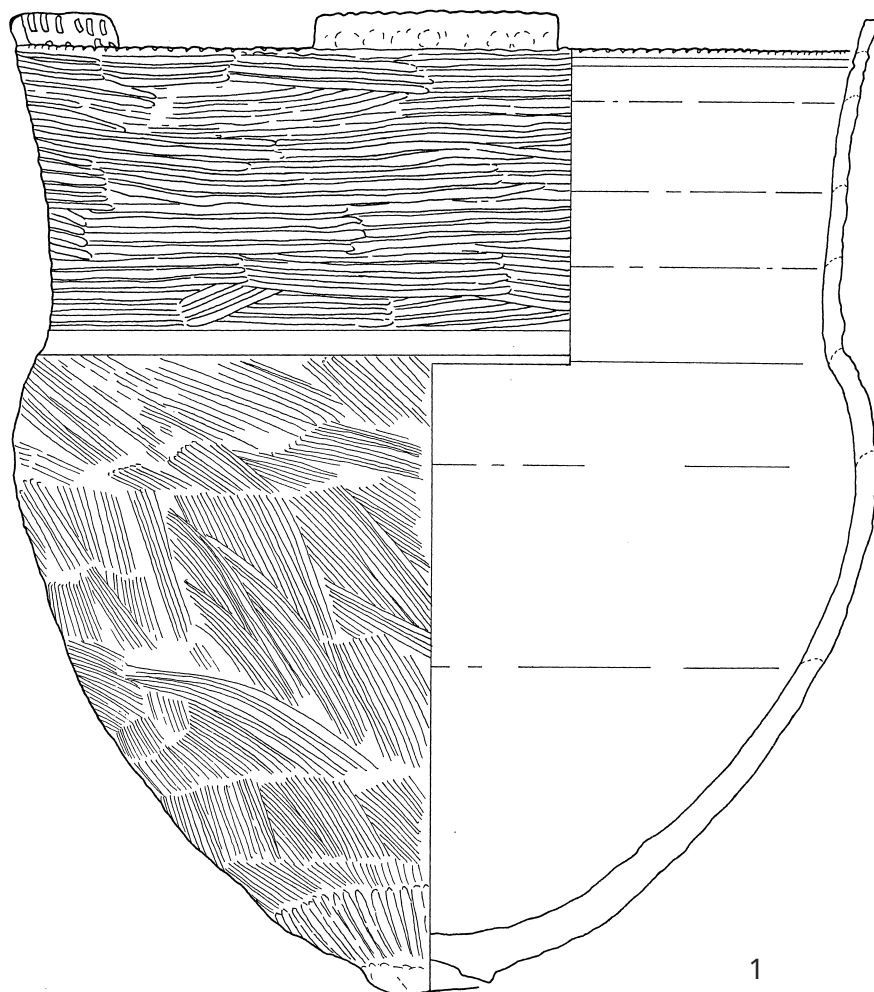
7、清野謙次・宮本博人 一九二六a「津雲貝塚人頭蓋骨の研究」『人類学

雑誌』第四三号第三 四号

- 8、清野謙次・宮本博人 一九二六b 「津雲石器時代人はアイヌなりや」『考古学雑誌』第一六巻第八号
- 9、清野謙次・宮本博人 一九二六c 「再び津雲貝塚人のアイヌ人に非らざる理由」『考古学雑誌』第一六巻第九号
- 10、清野謙次・平井隆 一九二八 「津雲貝塚人上肢骨の研究」『人類学雑誌』第四三号第三附録
- 11、清野謙次・平井隆 一九二八 「津雲貝塚人下肢骨の研究第一」『人類学雑誌』第四三号第四附録
- 12、清野謙次・平井隆 一九二八 「津雲貝塚人下足骨の研究第一」『人類学雑誌』第四三号第五附録
- 13、清野謙次・平井隆・関政則 一九二九 「四肢骨の研究に基づける日本石器時代人種論」『人類学雑誌』第四四巻第六号
- 14、清野謙次 一九三三 「日本石器時代人類」『岩波講座生物学』
- 15、清野謙次 「津雲貝塚の発掘」(大正八年十月五日大阪朝日新聞掲載)
- 16、清野謙次 一九六八 「備中国浅口郡大島村西大島津雲貝塚」『日本貝塚の研究』
- 17、島田貞彦・清野謙次・梅原末治 一九二二 「備中国浅口郡大島村津雲貝塚発掘報告」『京都市文学部考古学研究報告』第五冊
- 18、末永雅雄 一九三五 『本山考古室要録』
- 19、田幡丈夫 一九二八 「津雲貝塚人骨骨盤の研究」『人類学雑誌』第四三号第七附録

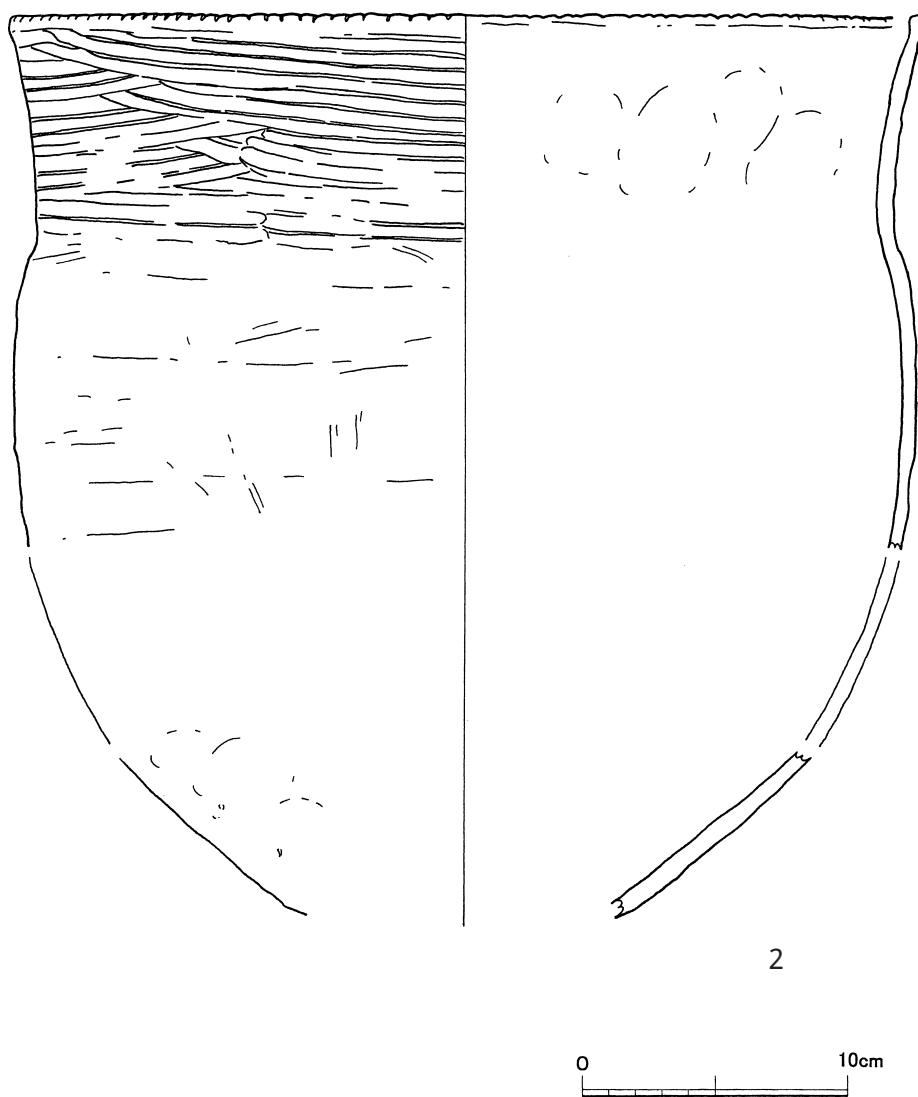
実測番号	本山番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
39	595	敲石	玄武岩	8.7	5.8	4.7	293
40	595	石錘	花崗岩	9.1	5.2	4.2	280
41	595	石核	サヌカイト	9.5	9.2	4.4	506
42	—	剥片	サヌカイト	5.6	4.6	1.1	
43	—	剥片	サヌカイト	4.4	2.7	0.7	
44	—	削器	サヌカイト	6.8	5.0	0.7	
45	—	削器	サヌカイト	5.8	3.8	1.0	
46	—	被熱剥片	サヌカイト	5.1	2.7	2.4	
47	—	削器	サヌカイト	6.1	4.6	1.1	
48	—	削器	サヌカイト	9.1	4.4	0.8	
49	—	剥片	サヌカイト	6.7	2.9	0.8	
50	—	削器	サヌカイト	9.6	4.1	1.0	
51	—	削器	サヌカイト	8.2	3.9	1.0	
52	594	削器	サヌカイト	5.4	3.6	0.7	
53	594	削器	サヌカイト	6.3	4.2	0.7	
54	—	削器	チャート	5.9	3.5	0.9	
55	—	剥片	サヌカイト	5.7	4.7	1.1	
56	—	削器	サヌカイト	5.8	3.6	1.6	
57	—	削器	サヌカイト	4.7	3.3	0.8	
58	—	剥片	サヌカイト	6.0	5.0	1.1	
59	—	削器	サヌカイト	5.4	4.1	1.2	
60	—	楔形石器	サヌカイト	4.4	2.5	1.2	

表2 津雲貝塚出土石器観察表

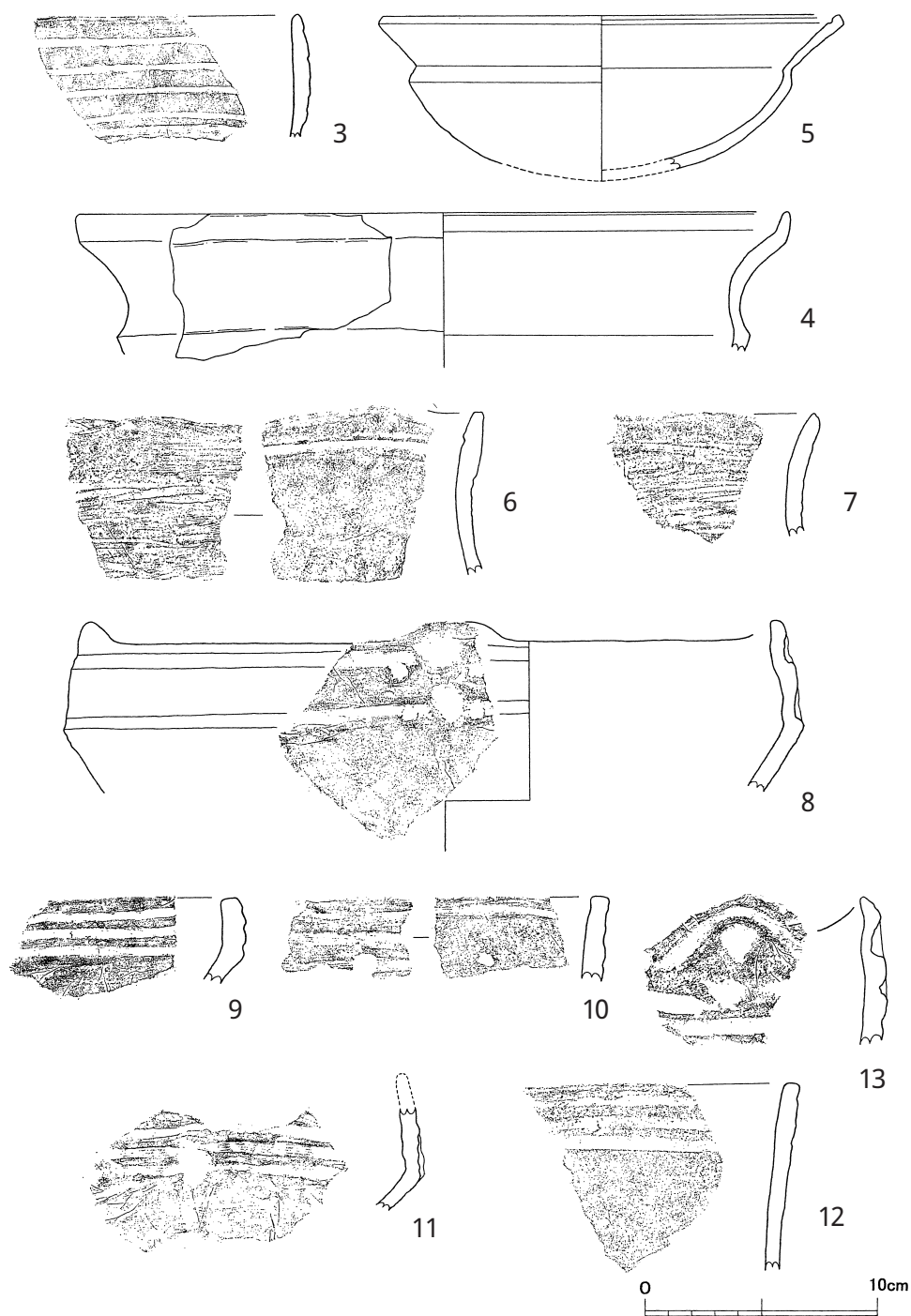


0 10cm

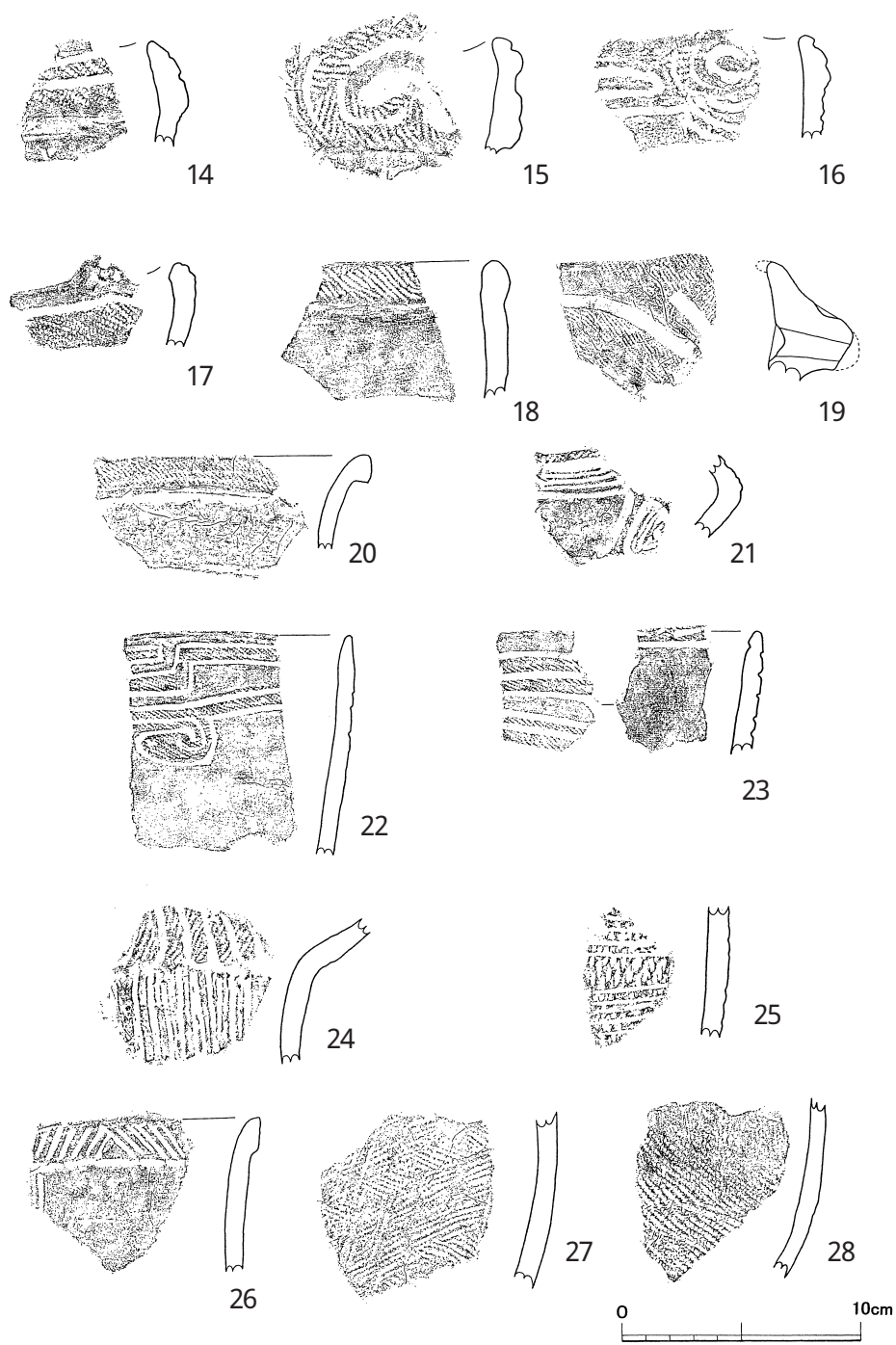
第3図 津雲貝塚出土遺物実測図(1)



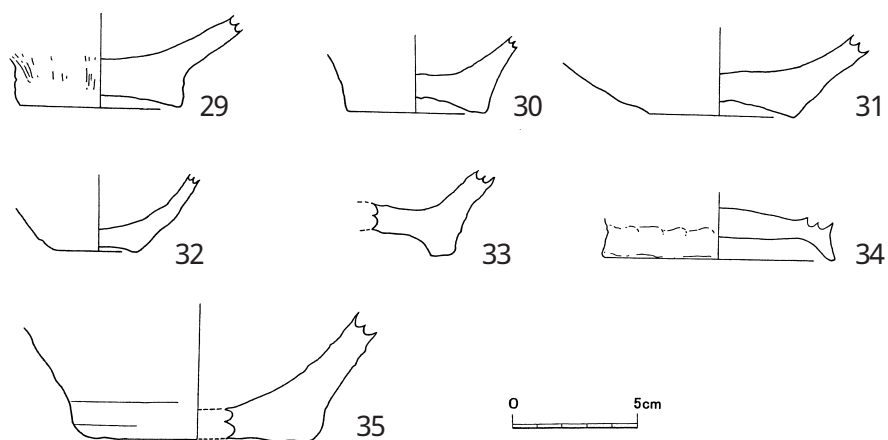
第4図 津雲貝塚出土遺物実測図(2)



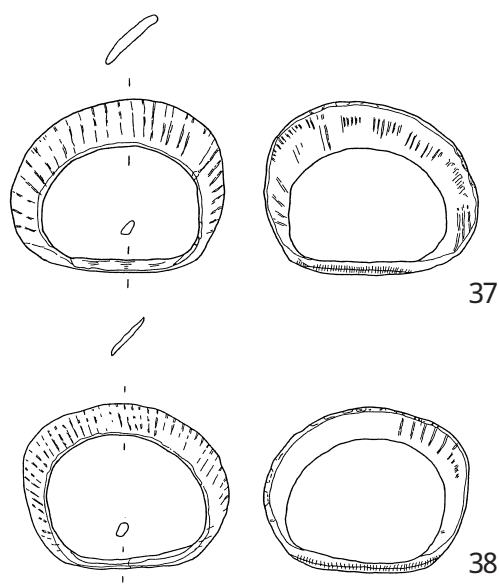
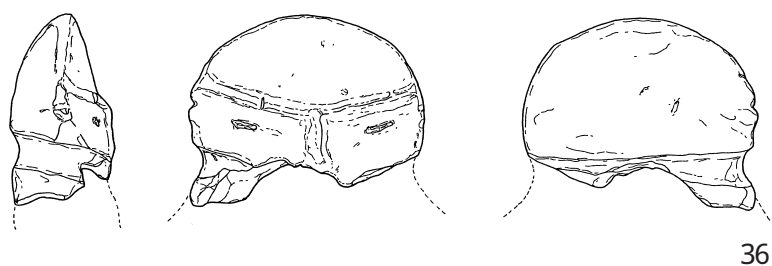
第5図 津雲貝塚出土遺物実測図(3)



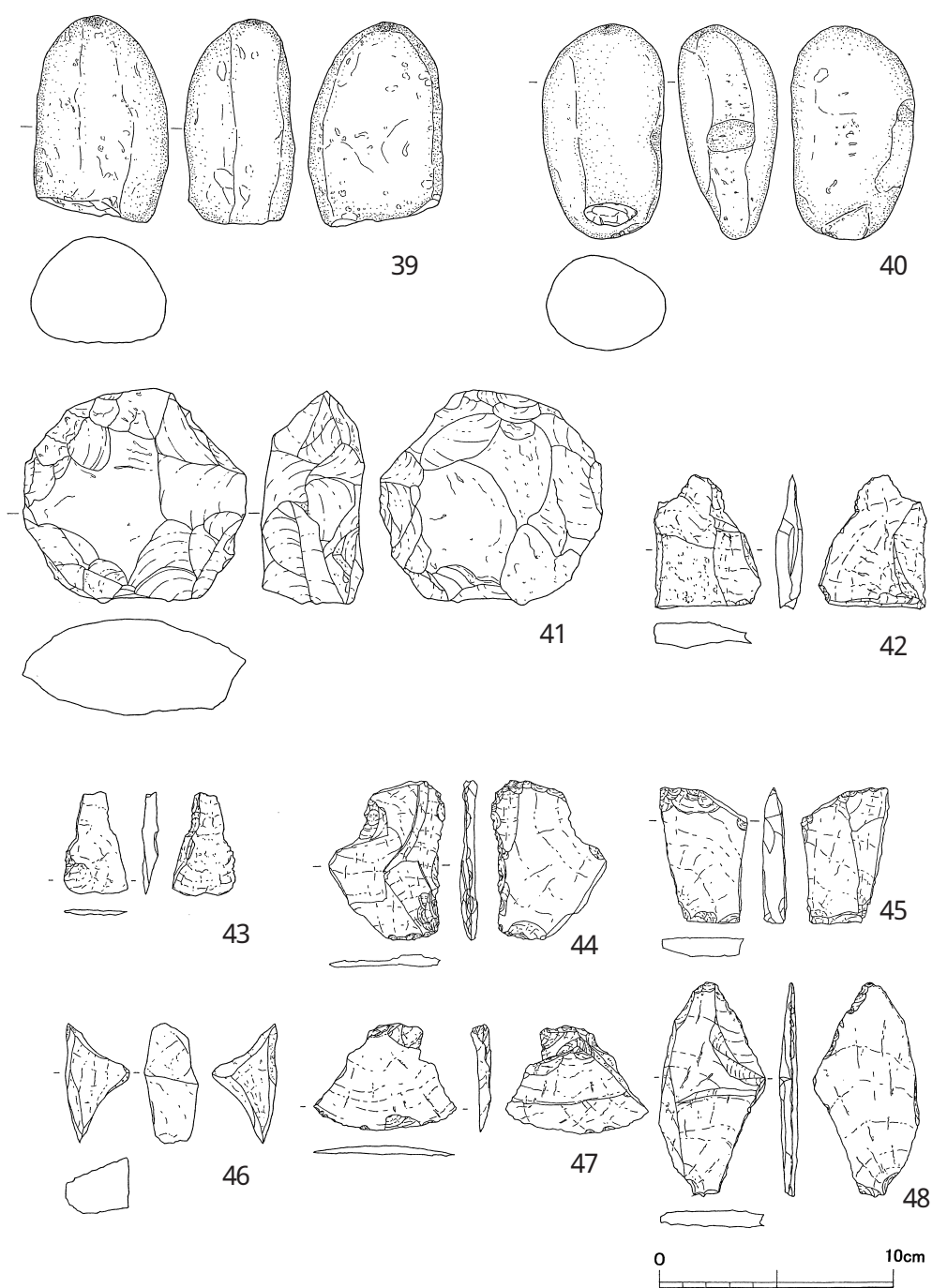
第 6 図 津雲貝塚出土遺物実測図(4)



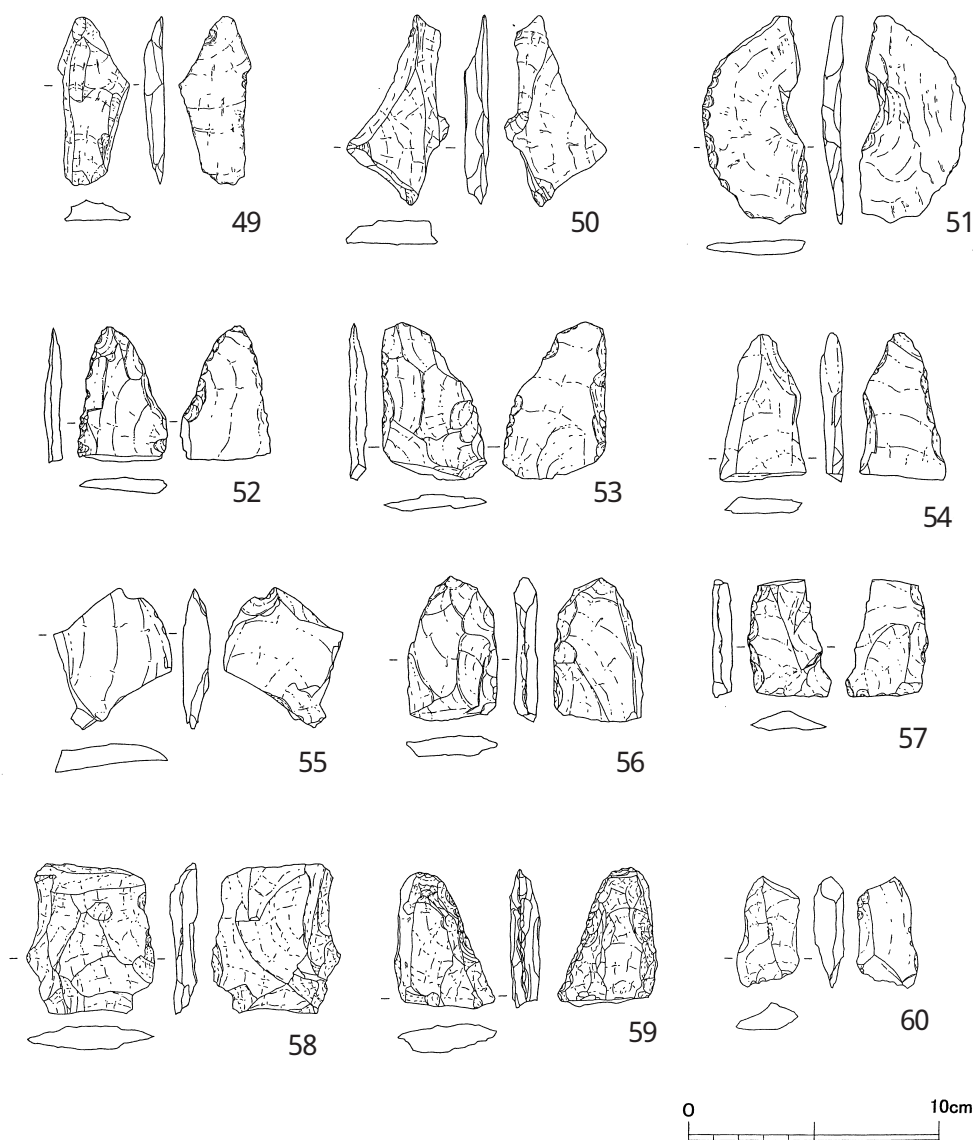
第7図 津雲貝塚出土遺物実測図(5)



第8図 津雲貝塚出土遺物実測図(6)



第9図 津雲貝塚出土遺物実測図(7)



第10図 津雲貝塚出土遺物実測図(8)